

平成 22 (2010) 年度本研究の活動

本年度は下のような活動をした（以下、敬称略）。

2010 年 4 月 3 日（土）～ 4 月 11 日（日）土屋が李淞ほかと中国陝西省西安・安康・関中に調査出張。



南宋の嘉定 17 年 (1224) 鉄鐘（安康）

【写真解説】安康市から数キロ西北にかつて新羅寺が存在していた。安康の玉皇閣に現存する南宋の嘉定 17 年 (1224) の鉄鐘（写真）の銘文には「大宋金州江西新羅寺」という記載がある。したがって南宋以前からすでに「新羅」が寺名に冠されていたことがわかる。清の鄭謙と王森文が編纂した『安康県志』によると、新羅寺には唐の南岳懷讓禅師の庵があるという。南岳懷讓 (677～749) は六祖慧能の法嗣であり、中唐時期に士大夫から尊敬された江西馬祖道一の師である。安康（金州）は懷讓の故郷であり、もう一カ所、懷讓ゆらいの万春寺が存在する。『安康県志』によれば、万春寺は懷讓禅師が卓錫した場所であり、唐の咸通年間 (860～873) に皇帝の勅命で建造されたという。懷讓ゆかりの寺になにゆえ「新羅」が冠せられるのか？ 懷讓の法嗣には本如と玄晟という二人の新羅人がいた^{*1}。ここに新羅と安康と懷讓を結びつけるヒントがありそうだが、私がここを調査したのは、長安から安康への古道の子午谷に新羅の金可記の碑があり、それとの関連を探るためであった。これについては本誌所載「終南山子午谷の磨崖碑と第三大洞天」を参照のこと。ところが、私は調査中に水泡瘡に罹ってしまい、その他の調査は不十分に終わった。

注 1…『景德傳燈録』巻 6、新文豊出版活字本、1993 年、106 頁

5 月 30 日（日）～ 6 月 5 日（土） 土屋・大形・二階堂・横手・鈴木・山下・丸山宏（研究協力者）が、本研究グループとフランス・パリ在住の中国研究者と共同で開催した「座談会 道教美術研究の現在一大阪からパリへ」（Daoist Art Exhibitions: from Osaka to Paris）に参加（フランス極東学院 l'École

注2…『東方宗教』第116
号、2010年、103～108
頁

française d'Extrême-Orient 会議室にて)、およびギメ東洋美術館 (Musée Guimet) とフランス国立美術館連合主催「タオの道 (La Voie du Tao)」調査 (Grand Palais にて)。詳しくは本誌所載「座談会 道教美術研究の現在—大阪からパリへ」(山下) を参照のこと。また、展覧会「タオの道 (La Voie du Tao)」については、次の項目の『道教美術の可能性』に所載の「ギメ東洋美術館+フランス国立美術館連合主催「タオの道—存在へと至るもうひとつの道程」(カトリヌ・ドラクール)、および山下一夫の報告^{*2}を参照のこと。

なお、この座談会は、2009年度に John Lagerwey が本研究の招聘で来日し、大阪市立美術館の「道教の美術 タオイズム・アート」を見学したのをうけて、当初の予定では彼も参加の予定であったが、時間の調整がつかなかった。彼は「タオの道 (La Voie du Tao)」に企画段階から関わっており、その図録に解説も寄せている。

6月 齋藤龍一・鈴木健郎・土屋昌明 共編『道教美術の可能性』(勉誠出版、アジア遊学133) に以下のような論文を発表した。

「道教美術」とは何か (鈴木健郎)

道教の歴史 (横手裕)

漢代銅鏡にみえる神話および道教の図像について (李松)

道教美術における文字の問題 (土屋昌明)

明清小説の版画に見える道教神—三清と如意 (山下一夫)

道壇と神画 (丸山宏)

日本渡来の華人の神々 (二階堂善弘)

平田篤胤と「五岳真形図」 (森瑞枝)

朝鮮半島における道教美術 (土屋昌明)

古代オリエントと道教美術 (大形徹)

6月6日(日) 劉礼紅 (New York City University 博士課程) が来日。7月26日(月) まで東京国立博物館・京都国立博物館・大阪市立美術館などの関連所蔵品についての調査と研究。

7月21日(水)～7月25日(月) 劉礼紅が京都国立博物館・京都大学人文科学研究所・大阪市立美術館を調査。

7月26日(火) 劉礼紅が帰国。

7月28日(木) 樊光春 (陝西省社会科学院宗教研究所研究員) が来日。8月2日(火) まで東京国立博物館・神宮文庫・京都国立博物館などを調査、本グループの研究集会で発表と討論。

7月29日(金) 樊光春と土屋が東京国立博物館を調査。
7月30日(土) 樊光春と土屋と大形は伊勢神宮および神宮文庫を調査出張。
7月31日(日) 樊光春と土屋は京都国立博物館・伏見稲荷大社を調査出張。

8月1日(日) 午後14時～午後18時30分 本年度第1回研究集会

場所：専修大学神田校舎7号館

議題：①「本年度の現地調査に関わる事前調査と注意点」

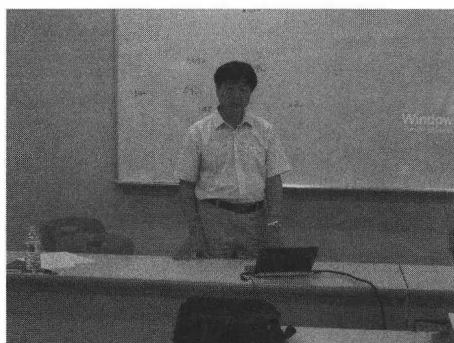
報告：土屋昌明(専修大学)「嵩山と終南山について」

横手 裕(東京大学)「華山について」

②「中国西北地区道教の現状」

報告：樊 光春(陝西省社会科学院宗教研究所)

通訳：土屋昌明



左図 樊光春氏

右図 研究会の様子

8月2日(火) 樊光春が帰国。

8月25日(水)～9月5日(日) 第2回現地調査(嵩山・華山・終南山など)

詳しくは本誌所載の「2010年夏 第2回洞天調査の概要」を参照のこと。

【金仙観】金仙観は、子午谷に入って4キロあたりに位置する。現地で入手した金仙観のパンフレットおよび賈慧法道長へのインタビューによれば、2004年に当地の村民の請求によって、陝西省道教協会副秘書長たる賈慧法氏と陝西省社会科学院道教研究センター主任の樊光春氏が発起人となり、長安県政府子午街道事務所、南豆角村、七里坪村の幹部および村民の理解と協力のもと、金仙観設立委員会が立ち上げられ、資金を集めた。そして2006年7月26日に竣工し、対外開放した。

これは樊光春氏が当地を散策中に玄都壇を発見し、古来の修道の場所を記念し保存するとともに、現在の道教に生かそうと呼びかけたようである。現地から採取された遺物の考古学的な検討によれば、遺物には後漢期の特徴を有するものがあるとのことである。そして、長安城北方、渭北高原にある天齊祠と

もに都城建築の南北軸を構成している。その後、終南山に修道した隠士たちはこれを祭壇に利用したという。

現地から出土した磨崖碑によって、唐末に新羅の留学生たる金可記がここで修道して昇仙したと考えられている。その関係で、韓国の道教界の人々が少なからず訪れるようになり、道教研究の学術交流も始まっている。すでに2002年8月24日には棲観に「中韓道教仙跡碑」が建立されるとともに、同地で「中韓日道教学術発表会」が開催された。これは陝西省社会科学院道学研究センターと韓国世界金仙学会の共催による。その成果は『道学尋真』（樊光春・崔炳柱・張応超主編、陝西省社会科学院道学研究中心・韓国世界金仙学会発行、2003年）という論文集となっている。それによれば、中国側研究者として周偉洲・樊光春・張応超・陳景富、韓国側研究者として崔炳柱・崔一凡・金洛必・王西平・金泳録・鄭在書・沈愚京・安德海らが参加している。また、日本からも野崎充彦氏が論文を寄せている。

金仙観では、現在、旧暦にあわせての祭礼や位牌の祭祀など宗教行為のほか、終南山での修道を志す者に飲食や宿泊の便宜を提供しているようである。

終南山の子午谷・玄都壇のふもとにある金仙観の賈慧法道長。（左）



注3…長崎はかつて大陸との交通が繁く、少なからぬ華人が居住していた。そのため、禅寺に道教関連の文物がみられる。詳しくは、『道教美術の可能性』所載「日本渡来の人々の神々」（二階堂善弘）を参照のこと。

2011年1月30日（日）～2月2日（水）土屋が長崎歴史文化博物館・長崎市歴史民俗資料館に調査出張*3。

2月6日（日）午後13:30～本年度第2回研究集会

場所：専修大学神田校舎7号館

議題：2010年夏の調査（嵩山・華山・終南山）の概要と所見ほか

（文責 研究代表者）